

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：32631

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K14246

研究課題名（和文）児童の創造的表現を促す鑑賞教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of art appreciation program to promote children's creative expression

研究代表者

石黒 千晶 (Ishiguro, Chiaki)

聖心女子大学・現代教養学部・講師

研究者番号：00814336

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：児童の鑑賞を新しい創造につなぐ教育の重要性が指摘されてきた。本研究で児童が鑑賞から触発を体験するための方法を検討し、それを教育現場で実践した。具体的には、ウェブ調査の中で児童が大人よりも同年代の作品、あるいは、抽象的な作品に触発されやすいことを明らかにした。さらに、児童の触発を促すオンラインワークショップを考案し、その効果を示した（石黒・夏川・岡田，2022）。児童から大人を対象にして鑑賞から表現を触発するワークショップ群をまとめた書籍も出版し（石黒・横地・岡田，2023）、美術・音楽教育の効果を検証する縦断研究にも取り組んだ（Ishiguro et al., 2023）。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は美術教育における鑑賞と表現の接続を実現するため、児童を対象とした教育プログラムを開発することを目的としていた。児童の鑑賞による触発を促す教材や鑑賞方法の特徴を明らかにした。こうした知見は鑑賞と表現の繋がりを理解する上で学術的にも意義深い。こうした鑑賞と表現教育プログラム事例を書籍にまとめることで、学校だけでなく美術館などの社会教育の場で実践できる教育の手法を提案することができた。また、そうした教育プログラムのデザインや評価のための視座も書籍にまとめた。本実践は美術などのアート教育を通じて創造的な学びを発展させるための具体的な教育方法を提案した点で社会的にも意義深い。

研究成果の概要（英文）：It has been pointed out the importance of art education that expands children's creative inspiration from art appreciation. In this study, we examined how children can experience inspiration from art viewing, and applied our research findings into the educational practices. Specifically, we found that children are more likely to be inspired by works of the same age or abstract works than those of adults or figurative paintings (Ishiguro, 2022). Furthermore, we conducted online workshops to encourage children's inspiration and showed its effectiveness (Ishiguro, Natsukawa, & Okada, 2022). We also published a book that compiled a group of workshops for children and adults to inspire expression from art appreciation (Ishiguro, Yokochi, and Okada, 2023), and engaged in a longitudinal study to examine the effects of art and music education (Ishiguro et al., 2023).

研究分野：教育心理学、認知科学

キーワード：鑑賞 創造性 触発 表現 美術教育 創造性教育

## 1. 研究開始当初の背景

美術作品を鑑賞することは私たちに様々な美的体験を与えてくれる。美術作品から経験する感情には美しさ、好ましさ、良さなどの快感情から、悲しみや恐怖などのネガティブな感情も同居する(石津, 2019)。美術作品の中には背景知識や文脈理解が必要な作品もあるが、馴染みのない作品に出会っても時間をかけて作品理解を進めることで超越的な感情体験を経験したり、鑑賞者の認知の枠組みや行動が変容することもある(Pelowski et al., 2017; Okada & Ishibashi, 2017)。こうした鑑賞による美的経験は時に、鑑賞者本人の創造性を触発することもある(An & Youn, 2018; Okada & Ishibashi, 2017)。岡田・縣(2020)は芸術における鑑賞と創造を、芸術作品を通じた表現者と鑑賞者のイマジネーション世界の交流とみなすことで、鑑賞という行為を芸術作品と鑑賞者という刺激と反応の関係だけでなく、芸術作品の背後にある表現者と鑑賞者のアート・コミュニケーションとして捉え直した。そして、芸術に関わる学びは美術史の知識理解や、表現スキルの獲得だけでなく、芸術文化に親しみを持つ態度(縣・岡田(2013)の創造的教養など)が含まれ、鑑賞教育は鑑賞から創造などの様々な学びへと拡張することが可能であることを指摘した(岡田・縣, 2020)。

鑑賞による創造の触発に焦点を当てることは、鑑賞教育の新たな可能性を拓く。実際、美術教育では鑑賞と表現をつなぐ教育が目目されるようになり(赤木ら, 2006)、鑑賞による触発の心的過程をモデル化する知見も提案されている(Ishiguro & Okada, 2020)。しかし、鑑賞による触発を引き起こす教育プログラムは主に青年期以降を対象にしたものが多く(e.g., 石黒・岡田, 2016)、小学校などの児童期を対象とした教育プログラムは十分に検討されていない。そこで、本研究はこれまでの青年期を対象とした、鑑賞による創造の触発や、それを促す教育方法についての知見を参考にしながら、どのような鑑賞教育が児童の創造的表現を促すかを検討する。

## 2. 研究の目的

児童の創造的表現を促す鑑賞教育の方法を検討するにあたり、いくつかの課題が想定される。第一に、児童期は認知発達が著しいため、鑑賞・表現活動においても小学校低学年と中学年、高学年によって青年期とは異なる心的過程がある可能性がある。そのため、発達過程による鑑賞やそれによる触発の特徴を理解する必要がある。第二に、言語発達の途上にある児童にとって、鑑賞や創造的表現について言語化することは難しいおそれがある。そのため、児童自身の言語化能力によらない、あるいは、それを助けながら鑑賞から創造的表現に至る過程を検討する必要がある。

## 3. 研究の方法

以上の2つの課題を踏まえて、本研究では以下の問いを検討することを予定していた。まず、2019年度は上述の背景・目的のもとで研究計画を立て、【基礎研究】として児童の触発を促す鑑賞教材の特徴を検討する実験的調査を行った。

しかし、2019年度以降は研究代表者の所属機関の異動により、新たな研究協力者との協力体制を構築する必要が生まれた。また、2020年から実施予定であった児童を対象とした実験・実践研究はCOVID19の蔓延によって対面での実施が困難になった。そのため、【実験・実践研究】は児童を対象にした対面の心理学実験は断念せざるを得なかった。その代わりに、オンラインで実施可能な方法で触発を促す鑑賞教育プログラムを開発するように指針を修正した。

コロナ禍では児童を対象とした対面の実験が困難になったものの、オンラインでの教育実践を開発することで、特定の場所や地域に限らずに参加者を募集することができ、動画に記録することによって教育実践の方法を広く伝えることも可能になった。また、厳密に統制された実験室実験が困難になったことから、ワークショップなどのインフォーマルな教育現場での芸術に関わる実践を開発・評価することについて、これまでの実践を踏まえてまとめる機会を得た。これは【鑑賞から創造を触発する教育実践を開発・評価する視座の構築】として書籍にまとめた。

## 4. 研究成果

### 【基礎研究】児童の触発を促す鑑賞教材の検討

**方法:** 小学1~6年生の児童、および、その保護者600組を対象にインターネットによるオンライン調査を実施した。参加者は表現スタイル(具象・抽象)と作者(大人・児童)が異なる絵画を2種類ずつ(合計8枚:図1)鑑賞した。そして、各絵画について「この絵画を見るとわくわくする」「この絵画を見て絵を描いてみたくなった」などの4項目からなる触発尺度(Thrash & Elliot, 2003を参考に作成)に回答した。なお、参加者児童の中には自分で回答することが困難な年齢の児童がいることが想定されたため、調査は保護者を通じて依頼し、児童の回答は保護者が代理で記入するように求めた。

**結果:** まず、児童が絵画作品を鑑賞したときの触発には年齢や学年による統計的な差は認められなかった。ただし、鑑賞する絵画の表現スタイルや作者によって触発を受ける程度が異なることが明らかになった(図2)。具体的には、児童は具象画よりも抽象画から触発を受けやすいこと、

大人(芸術家)が描いた絵画よりも同年代の子どもが描いた絵画に触発を受けることがわかった。これらの児童の触発を促す作品特徴は大人のそれと異なる。大人は具象的な絵画により触発を受けるが(石黒・岡田,2018)、児童は自分と同年代の作者の抽象的な表現に触発を受ける。これは子どもにとっての現実世界のリアリティと大人の世界が異なることを意味しているかもしれない(木村, 2015)。抽象的な表現におけるポイントやストロークは子どもにとっては重要な意味を持つものである(安斎,1986)。触発は快感情との結びつきが強い(Thrash & Elliot, 2003)ことから、児童にとっての触発も、児童にとっての快感情を生み出す作品特徴やそれとの関わりが重要だと考えられる。

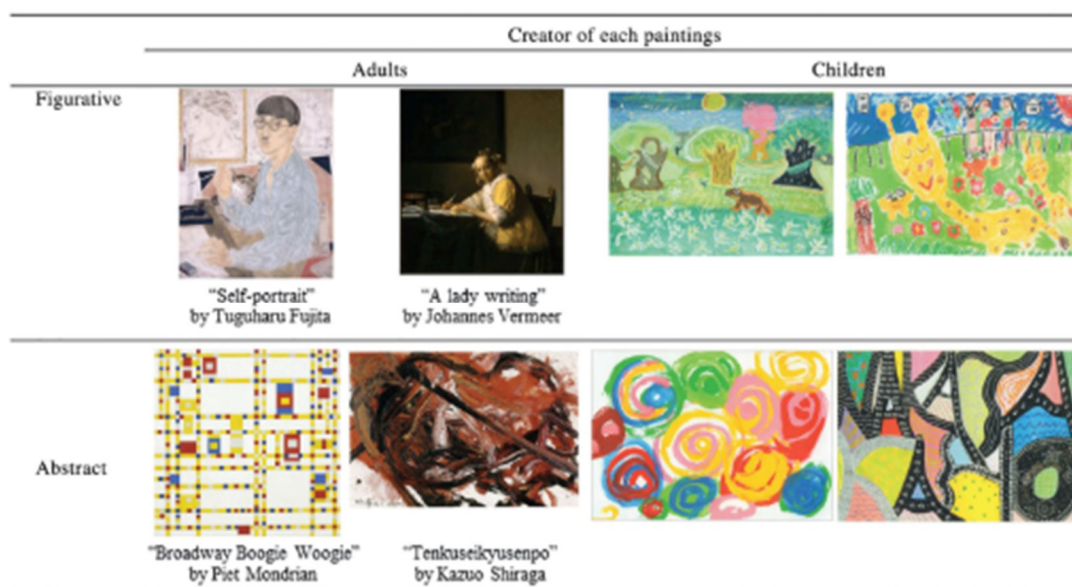


図 1 児童が鑑賞した絵画(Ishiguro, 2024)

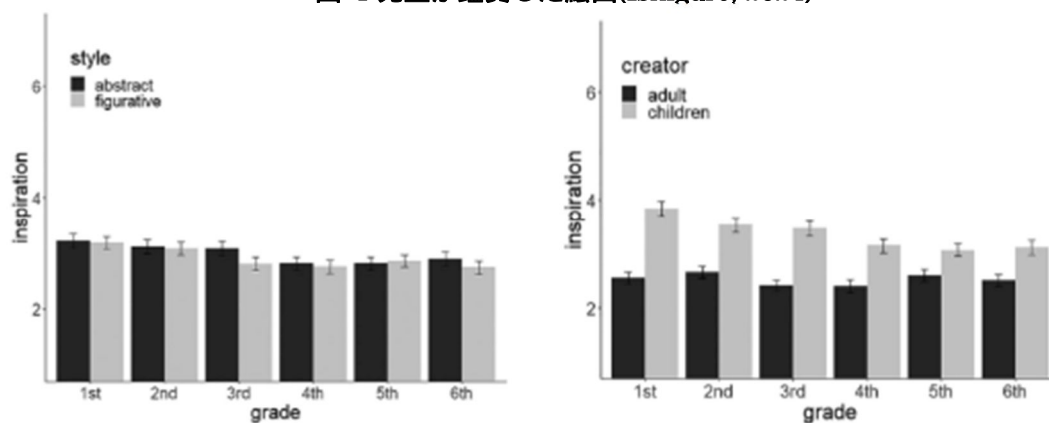


図 2 絵画の表現スタイル・作者による児童の触発(Ishiguro, 2024)

【実験・実践研究】触発を促す鑑賞方法の検討

基礎研究を踏まえて、児童が作品をどのように鑑賞すれば触発が促されるかを、複数の実践を積み重ねることで検討した。先行研究では馴染みのない作品でも模写や模倣などの作品と深く関わる鑑賞方法で創造的表現が促されることが示されている(Okada & Ishibashi, 2017; 石黒・岡田, 2016)。そのため、児童にとって馴染みのない作品でも鑑賞方法によっては創造的触発を促すことが可能だと考えた。2020年から株式会社MIMIGURIのアートエドゥケーターの夏川氏と協力体制を築き、創造的触発を促す鑑賞方法を検討した。

**方法:** 馴染みのない作品から創造的触発を生み出す方法として、虚体験という手法を取り入れた。これは夏川氏が考案した手法であり、絵画作品を10秒程度鑑賞してから目を閉じて作品のイメージを思い浮かべ、そのイメージを創造的イマジネーションへと広げる手法である。

コロナ禍でも実施可能なオンラインワークショップという形式で虚体験を取り入れた教育プログラムを実施した。コロナ禍で児童にアクセスする機会が制限されたため、最初の実践1は27名の一般成人、実践2は17名の大学生を対象に実施した。

**結果:** 実践1の結果、参加者の触発体験は日常生活と絵画鑑賞中、ワークショップの活動中と絵画鑑賞中で変化がみられる可能性が示唆された。実践2では参加者の触発体験はワークショップの前後で高まったことが示された。実際、参加者はワーク中に「小説を書き無くなった」「粘

土で家の模型を作りたくなった」「頭の中に思い浮かんだことを表現したい」など具体的な行動の動機づけが触発されていたことがわかった(石黒・夏川・岡田,2022)。

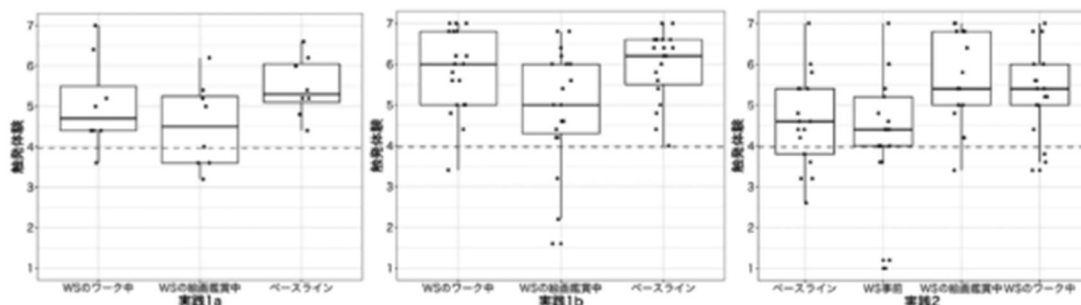


図 3 創造的触発を促すワークショップの効果(石黒・夏川・岡田, 2022)

この教育実践は児童対象にも実施し、小学生低学年から高学年、中学生にも触発を促すことが示唆された。夏川氏とは「虚体験」をベースとした児童向けのオンラインワークショップを他にも複数実施しており、ワークショップでの実践の様子や成果について、参加児童の保護者に報告したり、保護者の感想をインタビューするなどの取り組みを行っている。こうした成果は論文以外にもウェブ記事などでまとめて、子ども向けのワークショップを行う実践者が手軽にアクセスできるウェブサイト構築する準備を進めている。

【鑑賞から創造を触発する教育実践を開発・評価する視座の構築】

過去から現在まで行ってきた芸術を通じた学びの教育実践について複数の事例をまとめるとともに、鑑賞による創造の触発という現象に着目して芸術学習を捉え直す理論的視座を構築した。こうした理論的視座と、鑑賞による創造の触発を促す教育実践の事例は東京大学の岡田猛教授と東京未来大学の横地早和子准教授とまとめて、書籍として共同執筆・編纂した(石黒・横地・岡田, 2023)。

具体的に、鑑賞による創造の触発には、自分の表現についてのイマジネーションと、他者作品に関するイマジネーションを行ったり来たりするようなデュアルフォーカス(dual focus)の状態が必要であることを示した。そして、デュアルフォーカスを促す上で(1)表現や創作への抵抗を和らげる準備、(2)鑑賞のデュアルフォーカスを促す工夫をまとめた。特に(2)については本書の中にまとめた13の事例から(a)鑑賞から表現、(2)表現から鑑賞、(3)鑑賞と表現を同時に、交互に繰り返す、(4)鑑賞と表現のジャンルや手段をずらす、という4つのデザインの有効性を説明した。(4)の鑑賞と表現のジャンルや手段をずらすという「鑑賞のずらし」の具体例としては、鑑賞する作品のサイズを意図的に大きくしたりして、これまで目に入っても注意を向けていなかった要素も見えるようにするような方法、また、【実験・実践研究】で構築した目を閉じてイメージの中で作品を見るような「虚体験」も含まれる。また、参加者にとって普段は鑑賞しないような作品をあえて見ることも含まれる。

表 1 鑑賞のずらしの種類と具体例(石黒他, 2023)

ずらしの対象	具体例
作品のサイズ	鑑賞する作品のサイズを大幅に変更する
作品の表現様式	鑑賞作品を馴染みのない表現様式のものに変更する
表現のジャンルや手段	鑑賞する作品とは別のジャンルや手段で表現する
芸術に対する既成概念	一般に芸術とは思わないもの(例えば、ドアノブ)を芸術作品として鑑賞する

さらに、鑑賞による創造の触発のワークショップのように触発によるアート・コミュニケーションを芸術による学びの場に取り入れるときに、どのような評価が可能かについても視座を提案した。そもそも、アートワークショップは多様な目的をもつ参加者が集まる。そこでは、フォーマルな教育現場で重視される知識・スキルの獲得だけでなく、その場で実践者や他の参加者と様々な形で交流し、触発を経験することが目的になる。そのため、鑑賞による創造の触発を促す教育実践では参加者の変化は知識・スキル獲得とは

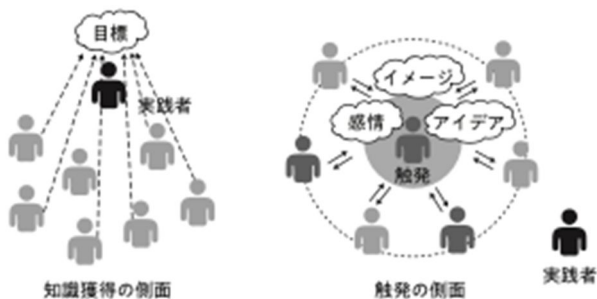


図 4 芸術教育実践を通じた参加者の変化(石黒他, 2023)

異なる枠組みで理解する必要がある。

さらに、触発を促すような教育実践は、美術館などの社会教育などインフォーマルな学習の場で実践されることが多い。こうしたインフォーマルな場では教師と学習者という2者関係だけでなく、実践者・参加者・実践団体や機関という3つのステークホルダーが教育実践の場を通じて互いに学び合い、個人として、また、集団としての学びを深めていく。特に、実践者や実践団体や機関は、1回きりの実践で終わらずに、複数回実践を重ねたり、ある実践を改良して発展的な実践を展開する場合も多い。そのため、触発を促すような教育実践は3つのステークホルダーのそれぞれの視点から実践評価を行う必要がある。さらに、そうした実践評価では、あらかじめ設定した学びの目標だけでなく、期待していなかった学びが生まれること、それによって実践者や団体・機関の学びのビジョンが刷新されていく可能性がある。石黒他(2023)はこうした触発を促す教育実践のデザインから評価まで理論的視座を13の教育実践の事例からまとめた。

以上に述べた基礎研究・実験/実践研究・教育実践を開発・評価する視座の構築、美術教育の効果を検討する研究(Ishiguro et al., 2023)を通じて、本研究課題は児童から大人まで鑑賞から創造の触発を引き出す教育実践について、実証的知見をもとにしたデザイン方法を提案し、その評価方法についても新たな視座を示すことができた。

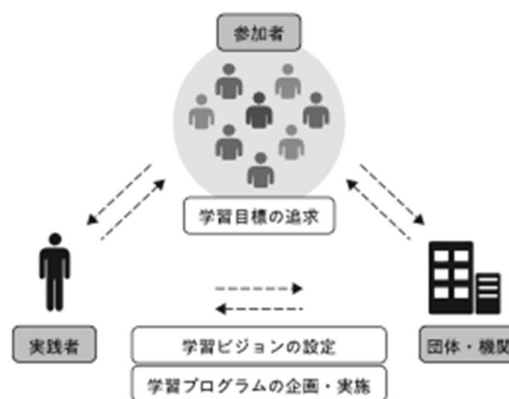


図5 触発を促す教育実践のステークホルダー  
(石黒他, 2023)

#### 引用文献：

- 赤木里香子, 森弥生, & 山口健二. (2006). 美術鑑賞教育のタイポロジー. *美術教育*, 2006(289), 8-15.
- 縣拓充, & 岡田猛. (2013). 創造の主体者としての市民を育む「創造的教養」を育成する意義とその方法. *認知科学*, 20(1), 27-45.
- An, D., & Youn, N. (2018). The inspirational power of arts on creativity. *Journal of Business Research*, 85, 467-475.
- Ishiguro, C., & Okada, T. (2020). How does art viewing inspire creativity? *Journal of Creative Behavior*, 55, 489-500. <https://doi.org/10.1002/jocb.469>
- 石黒千晶, & 岡田猛. (2016). 創造的教養を育む芸術教育実践: 日常の写真活動に及ぼす効果. *認知科学*, 23(3), 221-236.
- 石黒千晶, & 岡田猛. (2019). 絵画鑑賞はどのように表現への触発を促進するのか?. *心理学研究*, 90(1), 21-31.
- 石津 智大 (2019). *神経美学: 美と芸術の脳科学*. 共立出版
- 岡田猛, & 縣拓充. (2020). 芸術表現の創造と鑑賞, およびその学びの支援. *教育心理学年報*, 59, 144-169.
- Okada, T., & Ishibashi, K. (2017). Imitation, inspiration, and creation: Cognitive process of creative drawing by copying others' artworks. *Cognitive science*, 41(7), 1804-1837.
- Pelowski, M., Markey, P. S., Forster, M., Gerger, G., & Leder, H. (2017). Move me, astonish me... delight my eyes and brain: The Vienna Integrated Model of top-down and bottom-up processes in Art Perception (VIMAP) and corresponding affective, evaluative, and neurophysiological correlates. *Physics of Life Reviews*, 21, 80-125.
- Thrash, T. M., & Elliot, A. J. (2003). Inspiration as a psychological construct. *Journal of personality and social psychology*, 84(4), 871.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Ishiguro Chiaki	4. 巻 66
2. 論文標題 What Kind of Paintings Inspire Children when Viewing Art?	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Japanese Psychological Research	6. 最初と最後の頁 41～54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jpr.12404	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石黒 千晶、夏川 真里奈、岡田 猛	4. 巻 39
2. 論文標題 表現や創造を触発するオンラインアートワークショップの開発と評価	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育システム情報学会誌	6. 最初と最後の頁 380～385
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14926/jsise.39.380	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ishiguro Chiaki、Ishihara Toru、Morita Noriteru	4. 巻 8
2. 論文標題 Extracurricular music and visual arts activities are related to academic performance improvement in school-aged children	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 npj Science of Learning	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1038/s41539-023-00155-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 石黒千晶
2. 発表標題 創造性指標のキモとキワ
3. 学会等名 認知科学
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ishiguro Chiaki, Okada Takeshi
2. 発表標題 How does art appreciation promote artistic inspiration?
3. 学会等名 Cognitive Science Society (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 石黒千晶・横地早和子・岡田猛	4. 発行年 2023年
2. 出版社 あいり出版	5. 総ページ数 266
3. 書名 触発するアートコミュニケーション：創造のための鑑賞ワークショップのデザイン	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------